第一章　ジェンダーはいかに再生産されるか？

Doing Gender & Undoing Gender

上野千鶴子

一　ポスト構造主義のジェンダー概念

こんにちは。「おひとりさま」の上野千鶴子でございます。が、今日は、その話は一切いたしません。このように堅いタイトルの講演会に、よくぞ来てくださいました。大学ですから講義モードでいこうと思います。

ジェンダー概念は、いろいろなところに広まってきましたが、ジェンダー概念は進化しております。今、使われているのは、言語論的転回以後のポスト構造主義のジェンダー概念です。一番有名なのは、バトラー（Judith Butler）という人です。その人によれば、「男とは何か、女とは何か」の定義は、ものすごく簡単です。「女とは、生涯にわたって女としてふるまった者のことであり、反対に男とは、生涯にわたって男としてふるまった者である」、それだけです。

いちいち「男だ、女だ」と下着まで脱いで、性別を点検して暮らすわけではありませんので、生涯にわたって「男のように」あるいは「女のように」ふるまったという実績が残れば、その

人は男だったとみなされたり、反対に女だったとみなされるだけのことです。

これで私の講義を終わってもいいのですが、なぜ、バトラーは、このようなことを思いついたかといいますと、バトラーに影響を与えたのは、ヘーゲル（Georg Wilhelm Friedrich Hegel）やフーコー（Michel Foucault）などです。そのなかに、アルチュセール（Louis Pierre Althusser）というマルクス主義者の「interpellation（呼びかけ）」という概念があります。

誰かに、「おい、そこの女」と呼びかけられたとします。そのときに、自分がそこに位置取り（positioning）をして、自分に呼びかけられたと同意して、「はぁ?」と振り向いたとき、あなたは女になります。

「おい、そこのおばはん」と呼ばれても、私が振り返らず、「おい、そこのお嬢さん」と言われて、「あら、私のことかしら」と言ったとしたら、私は、その呼びかけに答えて「お嬢さん」としてふるまったことになります。「おばはん」と言われて振り返らなければ、私は呼びかけに答えないことで、「おばはん」であることに同一化しなかったわけです。そのようにして、いわば、その場所にピンで留められるわけです。「おばはん」という言葉に、いちいち反応しているうちに、あなたはだんだんと「おばはん」になっていくでしょう。簡単でしょう?

例えば、「おい、そこの女」「女だてらに」「女ってものは……」という言い方があります。これは全て語り、すなわち言葉による実践です。それによって、物事の秩序を決めています。こ

のような行為を、フーコーは「規制的言説実践」といいました。このような言説実践の反復によって、男と女がつくられます。

そして、その言葉のなかで、ある出来事が起きます。言葉というのは、何かを指し示すのではなく、それを言うことそのものが、出来事であるという「言語行為論」を考えついたのは、オースティン（John Langshaw Austin）とサール（John Rogers Searle）という言語学者です。ここからバトラーという人は、「行為遂行性（performativity 演技・パフォーマンスを成し遂げること）」という概念を作り出しました。

例えば、「愛している」という言葉があります。「愛している」と言われたときに、「じゃあ、何なの？　愛してたら、どうだって言うわけ？」「お金くれる？」「指輪くれる？」「結婚してくれる？」「セックスしてくれるの？」と分解していきますと、「愛している」には、ほとんど何の意味もないことがわかります。「愛しているなら金をくれ」と言いたいわけではないですが、「愛している」と言ったその時・その場で、「愛している」という行為は完結しているのです。その言語の外にも、後にも「愛」はありません。ですから「愛している」と、そこらじゅうで言っている男性がいるとしても、嘘を言っているわけではなく、その都度、真実を語っていることになります。

このような概念の組み合わせから、何がわかるでしょうか。「私は××である」のところに、「男」「女」という項目を入れます。これを「アイデンティティ（identity）」といいます。私は

男であるとか女であるというのは、「ジェンダー・アイデンティティ（gender identity）」です。ジェンダー・アイデンティとは、「男というものは……」「女ってさ」などと男女を区別することから成り立っています。区別することを「差異化実践」といいます。こういう差異化実践を何度も繰り返し反復するなかで、澱（おり）のようにたまったものの効果がアイデンティティです。ですから、「男らしさ、女らしさ」というものは、男であるということ、女であるという原因があり、その結果として、「らしさ」が現れるのではなく、「らしく」ふるまい続けることから、結果として、「私は女」になったり、「あなたは男」になったりするということです。超わかりやすいですよね。

アイデンティティとは反復された言説実践の沈殿物である、というバトラーの命題にある「沈殿物（sedimentation）」という概念は、マルクスの「商品とは労働の沈殿物である」からきています。このようにジェンダー研究も、自分の専攻する分野のさまざまな学者や思想家の影響を受けて、その積み重ねから、このようなジェンダー概念が成り立ちました。

二　ジェンダーは言語がつくる

ポスト構造主義のジェンダー概念の一番の要は何かといいますと、ジェンダーは言語がつくるということです。「男／女」というカテゴリー、これは言語です。言語があるために、ジェンダー

が生まれるのです。それ以前に、自然のなかにある性別、例えばＤＮＡやホルモン、解剖学的な性差などについては、研究がどんどん進んでおり、そのあいだには連続性があり、「どこまでが男で、どこまでが女か」という線引きができないと、すでに答えが出ています。

そのなかでも、明らかにＤＮＡもホルモンもカラダの構造も男なのに、心は女という、不一致があることもわかりました。この不一致は、どちらに合わせればいいのでしょうか。カラダに合わせて、心を入れ替えればいいのかといいますと、心はそんなに簡単なものではなく、言語が心を支配しますので、心は簡単に変えられません。したがって自分の心に合わせてカラダをつくりかえる手術までする人もいます。

もともと連続性のある自然に、「男と女」「男でなければ女／女でなければ男」という二つしかない二項対立のカテゴリーを持ち込んだのが言語です。言語による性別には男と女の中間は、ありません。自然のなかの連続性に、切断を持ち込むのが、言語というものです。

これを非常にうまく表現した人がいます。伏見憲明というゲイの人です。「男性／女性」の「性」を、「男制／女制」と書くと、性別の人為性がよくわかります。性別とは社会的な制度として、男としてふるまう、女としてふるまう二種類の人々の集団がそこにあるということを意味します。これで、ほとんど結論を言ってしまっているようなものですが……。

では、言語がどのようにして人を支配しているかということを考えますと、二〇世紀の学問のなかで、ありとあらゆる学問に対して、最も大きな影響力を与えたのは言語学でした。言語

を研究する人たちを「言語学者」といいますが、その言語学者に、構造主義言語学を提唱したソシュール（Ferdinand de Saussure）という人がいます。その人が、現実が言語を生むのではなく、言語が現実を生み出すと主張したことで、言語観が一八〇度がらりと変わりました。これを「言語論的転回（linguistic turn）」と呼んでいます。

「言語って何?」と問われたら、皆さんは、言語は単語と文法の集合から成ると思っているかもしれません。その答えは、「構造主義言語学」では完全にアウトです。言語体系は何からできているのかといいますと、「話す（発話 parole）」という個々の行為と、その解読規則（langue）から成り立っています。その集合が言語（language）というものです。相手と自分が言語を共有しているからこそ、初めて相手に通じます。誰にも訳のわからない、自分だけの言語を話しても通じません。ですから「話す」というのはコミュニケーション行為です。

これを、社会に置き換えてください。「社会とは何か?」という問いに対して「社会は個人の集合である」では、完全にアウトです。「社会とは、個々人の間の行為（practice）の集積と、その行為が何を意味するかという解読規則（code）の結合である」というのが、言語論的転回以降の社会システムの正しい理解の仕方です。

では、社会が個人の集合でなければ何でしょうか。そもそも個人とはいったい何でしょうか。個人とは、それまでは行動の主体だと思われてきました。では、個人は自由に行動することができるかといいますと、そのような主体はどこにもいません。それまでは、私たちは、デカル

トが言うように「我思う、故に我あり」と、自己という主体は自由だと思ってきました。「そんな自由な主体など、どこにもない」と、主体に死を宣告したのが、ミッシェル・フーコーというおじさんでした。

なぜかといいますと、行為というのは、必ず人と人の間で発生します。他人に自分がやったふるまいの意味が通じるということは、そのふるまいの解読規則が、既にその人との間で共有されているからです。つまり行為とは必ず、コミュニケーション行為なのです。

今、私は話しています。私の話している言葉は通じますね。日本語という、私が生まれる前から既にあった言語を学習して話しているからです。たった今、話した言葉のなかで、私が自分で発明した言葉はただの一つもありません。自分で発明した言葉を話したら、このレクチャーは完全に成り立たなくなります。それは言葉でなく、タダの音声ですね。

言語というものは、私が生まれる前からあり、私の外にあり、私の死んだ後にもあります。言語は自分に属さない、他者に属するから、「他者の言語」ともいいます。この他者の言語を学習して、その言語の規則に渋々、あるいは進んで従ったときにだけ、人は社会的な存在になります。人間として、他人とコミュニケーションができるようになります。

では、その言語というシステムに従ったときとは、システムに従属したときということです。これを英語で「何々に従属する（subject to…）」と言います。言語システムに従属したときに、初めて人間は社会的な存在になるわけですが、その言語システムのなかに、「男と女」というカ

テゴリーが既に含まれています。言語カテゴリーを使わずに、私たちは話すことができません。とりわけ、日本語では、主語を選ぶのに、例えば、「俺」と言うか、「僕」と言うか、「私」と言うか、「あたい」と言うか、ジェンダーを意識せずには、一人称単数形すら選べない言語のなかに、私たちは暮らしているわけです。その意味では、言語はジェンダーまみれです。

三　「状況の定義権」をめぐる権力闘争

言語は知の集積ですから、「知は権力である」と言い出す人たちが出てきました。では、その権力とは、いったいどういうものなのでしょうか。ポスト構造主義、つまり構造主義を通過したあとの社会科学は、権力概念をも変えました。皆さん方が、どこかで習ったであろう権力概念とはどのようなものかといいますと、マックス・ウエーバー（Max Weber）おじさんによりますと、「権力とは、その人を意に反して従わせる力のことである」と定義されています。そう思ってきたでしょう？　この定義では、権力とは、自分の外にあって、自分を抑圧するものになります。ところがフーコーは、権力を「関係の網の目にはりめぐらされた（自発性を調達する見えない）強制力」と定義しました。ジェンダー（性別）も、こういう権力の一種です。

例えば、皆さん方が、新入生歓迎会とか、会社の宴会に参加したとします。先輩の男子やおっ

さんのなかに、「女子だから、お酌せよ」とか言う人がいるかもしれません。最近の女の子は、「なんでやんなきゃいけないでんすか？」と言うでしょうが……。

しかし、ときどき女性のなかに、いそいそとやってしまう人がいるのです。誰にも命じられないのに、勝手にカラダが動いてしまうことを「身体化されたジェンダー」といいます。このように権力は内面化されて、生まれてからずっと身に付け、身体化されて、意識にも上らないように、いそいそ動いてしまう女性をつくりあげます。こんな女性がいると、ことあるごとに、「キミと違って××ちゃんは女らしいよね」と何かにつけて比較されますから、本当にやりにくいですね。

しかし、身体化された権力は、なかなか抜けません。このようなふるまいをもたらすのも、また権力だと考えると、すごくわかりやすいですね。ということは、権力は、ありとあらゆるところに、網の目のように張り巡らされていて、人を自発的にさえ動かすものです。強制力として目に見えなくても、人がそれに従って動いてしまうようなものだと考えることができます。

言語は権力です。言語のはたらきは、ある状況が何であるかを定義します。権力とは、その「状況の定義権」のことをいいます。これをすごくわかりやすく説明するには、セクハラの加害者と被害者の間に、大きな認知ギャップ（perception gap）があることを、例にするのがよいかもしれません。

日本でいちばんセクハラに詳しいといわれる、牟田和恵さんという社会学者が書いた、『部長、

その恋愛はセクハラです！』（集英社新書）というおもしろい本があります。私は、自分の勤務先の大学でハラスメント防止委員会の調査員も調停委員もやりました。セクハラ事案からわかることは、ほとんど決まって男性が「あれは恋愛だった」「合意だった」と言うことです。対して女性のほうは、「あれは強制だった」「ノーが言えなかった」「セクハラだった」と言います。そこには互いに埋められないほど大きい認知ギャップがあります。

加害者の「状況の定義」にしたがって、「合意だった」で通してしまえば、加害者は免責されます。そこでは、状況の定義権をめぐる権力闘争が起きているのです。被害者はそれを「セクハラだった」と、異なる「状況の定義権」を行使して、異議申し立てすることができます。しかし、被害者は弱者ですから、この「状況の定義権」をめぐる権力闘争では、これまで女性に勝ち目はありませんでした。

最近ようやく、女性の側から「状況の定義権」を行使できるようになりました。セクハラの定義は、「意に反する性的言動」です。では、誰の「意」なのかといいますと、被害者の「意」、つまり主語が被害者になりました。セクハラの定義では、被害者側が状況の定義権を握っています。それぐらい法律が変わりました。これは大きな変化でした。

ここも大学ですが、私は長い間、大学でセクハラ問題に関わってきた経験から、男性教員に関しては、「まさか、あの人が……」とは決して思わないようになりました。加害者のなかには、もちろん妻帯者がいます。調停委員が、「先生には、奥さんも子どもさんもいらっしゃるじゃな

いですか」と言いますと、「ボクは自由恋愛の信奉者です」と答えが返ってきます。「よく言うよね……」と思いましたけど。

状況の定義権を誰が握るかをめぐって、熾烈な権力闘争が起きます。定義権を行使する側が権力を握ることになるわけですが、「慰安婦」問題でも同じことが起きています。「あれは軍隊売春婦だ」と保守派が言えば、「いや、性奴隷だ」と反対派が主張するということで権力闘争が起きているわけです。

四　非対称な差異化実践としてのジェンダー

このようなポスト構造主義の影響を経て、現在、ジェンダー概念の一番シンプルでわかりやすい定義は、ジョーン・スコット（Joan Scott）の「身体的差異に意味を付与する知」というものです。ジェンダーとは、その身体的差異のなかでも生殖機能にことさら特化した差異に、人生全般にわたる意味を付与した知だということができます。

例えば、「哺乳類」という命名を考えてみてください。哺乳類という名称はおっぱいがあるか、ないかというところに注目してつけられました。「なんで、そこに目をつけるんだよ。どんなセクハラ的な視線を動物に向けてるんだよ」と思うくらいですが……。命名自体がおっさん目線

ですね。

ヒトでは、誕生の際に外性器、つまりちんちんがあるか、ないかに従って、男と女を区別しています。man／womanでは子宮（womb）のあるのが、womanです。他に身体的差異では、皮膚（肌）の色、あるいは障害者であれば身体的な違いに一定の意味を付与する「知」が権力です。

このときに、差異化にともなって区別された人々の間に二項対立が生まれます。しかもこの二項対立は、「白と黒」のように、項を入れ替えても成り立つようなものではありません。例えば「非行少年」の反対語は「善行少年」ではありませんし、「患者」の反対語は「健康人」ではありません。反対語は空白、つまり「非行少年でない者」「患者さんでない人たち」と呼ぶほかないように、「男とは何者か」といえば「女でない者」と定義するほかないのです。これを「欠性対立」と呼びます。

このように、項を入れ替えることができない差異化を、「非対称的差異化」といいます。これを言ったのは、クリスティーヌ・デルフィ（Christine Delphy）ですが、デルフィは非常にわかりやすいジェンダーの定義をしてくれました。

ジェンダーとは、社会的かつ恣意的な——恣意的というのは、根拠のない、思いつきのいい加減な——差異を示す、二つの項ではなく一つの概念である。それは、分割された男／女の二つの項を指すのではなく、分割線それ自体を指すものであり、しかも、そこには上下の序列と

いう非対称な権力関係がある、と。

例えば、「今日、ここに来ていらっしゃる方のなかで、四〇代以上の人、手をあげてください」と言ったとします。そのとたん、「四〇代」というカテゴリーで、さっと分割線が引かれます。あるいは、「このなかで、おひとりさまの人、手をあげてください」と言ったら、おひとりさまと、それ以外の人を差異化していることになります。

「男の子、こっちに並んで。女の子、あっちに並んで」という指示を、保育所でも幼稚園でもやっていますが、やった途端に、そこでジェンダーの差異化という言説実践をやっていることになります。

デルフィさんは、このようなことも言っています。「ジェンダーの枠組みのなかに男性を位置づけるなら、男とは何よりも『支配する者』である。男に似るということは『支配する者』になるということである。しかし、支配者になるためには、支配される者がつねに必要になる。全員が支配者である社会は考えられない」。

本当にわかりやすい言い方です。これを、そのまま真似したような言い方をした野村浩也という沖縄の研究者がいます。沖縄人差別は人種差別ともいうべきものですが、セクシズム（Sexis性差別）とレイシズム（Racism 人種差別）は、構造的にとても似ています。野村浩也くんの文章をデルフィにならって少しつくり変えてみると、このようになります。

「ナショナリズムの枠組みのなかに日本人を位置づけるなら、日本人とは、まずなによりも（沖

縄に対する）差別者である。日本人になるということは、差別者になるということである。しかし、差別者になるためには、差別される者が必要になってくる。全員が差別者である社会は考えられない」と。

では、沖縄人にとって、差別からの解放とはいったい何でしょうか。答えは、おのずから明らかです。「日本人のようになる」というのは、沖縄人にとって解決にならない、というのが答えです。

理論は、実践的な帰結を持っています。ジェンダーとは、階層性、つまり非対称な権力関係を示す概念です。この非対称性をそのままにして、項を入れ替えることは、何の解決にもならないということが、理論から導き出される実践的な帰結です。

例えば、よくある議論ですが、「キミ、主婦になるのが、そんなに嫌なの？　だとしたら、男にも家事育児の好きなやつがいるだろうから、そういう男を探して、ハウス・ハズバンドになってもらえば？」と言う人がいます。「男の買春にむかついているの？　女もホスト買いしたらいいじゃん」とか、このようなことを言う人たちは、必ずしもいないわけではありません。ですが、「買う者」と「買われる者」、あるいは「金を稼ぐ者」と「養われる者」というような項の非対称性をそのままにして、男女を入れ替えるだけでは、何の解決にもならないことが、理論から導かれます。

したがって、女性解放は、「男に似る」ことが目的ではないと、理論からはっきり言えます。

私は、男のようになりたいと思ったことは、ただの一度もありません。あんなつまらない生きものになって、何が面白いのだろうかと思います……。しかし、実は男性のほうも、このジェンダーの非対称性のなかで、さまざまな苦しみや問題を抱えているのは事実です。

五　“Doing gender”という言説実践

このようなことを“Doing gender”と、概念化した研究者がいます。ウエスト（Candace West）とジマーマン（Don Zimmerman）という人です。ある人が属すると見なされる性別カテゴリーを参照して、その個人の置かれた状況を説明可能にする実践を指します。

「あんなことをするのは、あの人、女だからだよ」「男のくせに、なによ」というように、性別カテゴリーの制度的配置（institutional arrangement of gender categories）にもとづく解釈装置を私たちは用います。日々、私たちは“Doing gender”という差異化実践をやってきていることになります。

例えば、衣服も記号ですから、ファッションはコミュニケーション的な行為です。今日、私の格好は女装か男装かと言いますと、これを「埴輪ルック」と言います。埴輪ルックというのは、スカートの下にズボンをはくことです。これは男性に超評判が悪いファッションですね。「ス

カートならスカートで、ちゃんと脚を出せよ」「ズボンならズボンで、ハンパにスカートに見せかけるなよ」と。

ファッションのジェンダー越境ができるようになり、女性はズボンをはくことも、スカートをはくことも選択可能になりました。男性には、ファッションのジェンダー越境がまだできていません。男がスカートをはいたとたん、周囲から変な目で見られるでしょう。スカートは誰がはいても女に見えるという、最強の女装の記号です。男性異性装者にはスカート愛好家が多いですね。しかし、女性はスカートをはくと、下がスカスカするので、このようにスカートに見せながら、下にズボンをはく習慣ができました。これが「埴輪ルック」です。

女性もスカートをはけば「今日は女装をしました」などということができます。最初に申し上げたバトラーの「男とは誰か、女とは誰か」ということを、別の言葉で言うならば、「女とは、一生女装をして過ごした者のことである。男とは、一生男装して過ごした者である」と。服装もまた、記号というコミュニケーション行為ですから、それも差異化実践のひとつです。

セクハラを応用問題にしてみましょう。セクハラのいったい何が問題なのでしょうか。セクハラとは、権力の濫用による人権侵害であるという認識は、広く共有されるようになりました。セクハラが職場の上司と部下、大学の指導教員と指導学生といった非対称な権力関係のもとで起きることはよく知られています。職場の上司や大学の教員には、生産や教育などの組織目標を達成するための権力が、その地位に対して与えられています。そのポストに伴う権力を、そ

の目標以外のところに濫用するのがハラスメントです。

このとき、侵害される人権とは、いったい、いかなる人権なのでしょうか。それは「性的自己決定権」という人権です。自分の身体の自由を侵されるという人権侵害ですが、セクハラを人権侵害だというだけでは、何かしっくりしない気分があり、もやもや感が残ります。

セクハラをされるときに、いったい何が起きているのでしょうか。その経験をどのように名付けたらいいのでしょうか。セクハラはジェンダーという差異化実践です。取材に来た記者に対して、「おまえは、職業人である以前に女だ」「しょせん女だ」「オレサマの欲望をかき立てる存在だ」「思い知れ」という実践を、財務省の福田（淳一）元事務次官はやったことになります。そのことによって、「オレは、おまえを意のままにできる男という生きものだ」「オレがこういうふるまいができるのは、オレが男でオマエが女だからだ」という、男としての力の誇示、男としてのアイデンティティの再確認とジェンダーの再生産を、その時、その場で福田元事務次官はやったことになります。

「おまえは女だ」「しょせん女だ」と言うときの「女」とは何かといいますと、「女」の定義は超簡単、「男ではない者」のことです。男ではない者とは何かといいますと、男というものは欲望の主体ですから、男の欲望のために存在する客体、男にとっての他者となります。そうなると、女の価値は、男の欲望をかき立てること、つまりそそることが、女の存在理由です。女は、「オレサマをむらむらさせてなんぼ」「オレサマをむらむらさせない女は女ではない」と。ですから、

「ブスは女ではない」ということになります。男は、女を欲望の客体として値踏みすることで、繰り返し女性を他者化し、差別しているのです。

「セクハラ」が流行語大賞になったのは一九八九年ですが、そのとき、男性週刊誌に、「『きれいだね』もセクハラなのか、ギスギスする職場」という見出しが出ていました。そのとおり、「きれいだね」もセクハラです。「ブスだね」と同じくらいセクハラです。なぜでしょうか。そこで起きているのは、「女を美醜で値踏みする判定者はオレサマだ」という差異化実践だからです。「雨夜の品定め」（源氏物語「帚木の巻」）以来、女の価値の評価者は男であって、女は評価される側にいるという、この権力的な差異化実践を、その時、その場で繰り返し反復しているのです。

「女は、いつ女になるのか?」ということに、卓抜な説明を与えた女性学の研究者がいます。小倉千加子さんという心理学者です。『フェミニズムの心理学』のなかで、「少女にとって、思春期はいつから始まるのか、年齢を一切問わず、少女が、自分の身体が、男の性的欲望の対象となることを自覚したときから思春期は始まる」と。たとえ五〜六歳の女の子でも、媚態を示します。カラダをくねらせると女っぽく見えることを自覚しているのです。そのときから、もう女の子の思春期は始まっています。

財務省福田元次官のセクハラ問題について、「#もう私は黙らない」という抗議集会が、東京で開かれました。抗議文を持って財務省を訪れた女性議員たちを見て、自民党の長尾敬（ながおたかし）という議員が、「こちらの方々は、セクハラとは縁遠い方です」と言ったそうです。これ自体がセクハ

ラです。なぜかといいますと、「あんたたちは、オレサマをむらむらさせない。オレサマをむらむらさせるか、させないかが女の価値であり、存在意義だ。オレは値踏みする側にいるんだ」という差異化実践を、この男はやったことになるからです。

六　ミソジニー・ホモソーシャル・ホモフォビアの三点セット

このようなしくみを理解するのに、非常にわかりやすいのが「ミソジニー（misogyny）」という概念です。先ほど述べた、ウエストとジマーマンの“Doing Gender”のなかの「ジェンダーの制度的配置」を理解するのに、非常に役に立つのが「ミソジニー」という概念で、日本語に訳しますと「女ぎらい」となります。

男はいかに男になるのかといいますと、男は女によって男になるのではありません。他の男から男として承認を受けることによって、男になります。これを「ホモソーシャリティ（homosociality）」といいます。

他方、女はどのようにして女になるのかといいますと、「女にしてやる」「女になった」という言い方が表すように、女は男に選ばれることによって女になります。このようなメカニズムを見るだけで、「男が男になること」と「女が女になること」との間に、明らかな非対称性があ

ることがわかります。社会によっていろいろ違いますが、ざっくり言いますと、「男が男であることは、女から独立しているが、女が女であることは、男に依存している」という、これがジェンダーの制度的配置です。

なぜ、このように非対称性があるのかといいますと、社会の中核、つまり、権力という資源を握っているのが男性集団だからです。その男性集団のなかに、参入を許される男と許されない男がいます。どのような社会にも成人式、つまり成人男子の集団への加入礼がありますが、成人式とは、少年に課された試練を超えて、男の集団によって一人前の男として認めてもらうための儀式です。

その男性集団の絆を「ホモソーシャル（Homosocial）」といいますが、「ホモソーシャル」と「ホモフォビア（Homophobia 同性愛嫌悪）」は、セットになっています。男性主体から成り立っている社会の権力構造は、正式のメンバーであることを互いに認め合った男たちの連帯にもとづいています。この連帯は、限りなく恋情に近い。武士道のなかに、「恋玦」という概念があります。『葉隠（はがくれ）』を読んだ方にはおわかりでしょうが、「恋」という概念は、もともと男が男に惚れることからきました。「あいつのためなら、死んでもいい」と。女のために死ぬのは恥ですが、惚れこんだ男のために死ぬのは、男にとって限りない名誉です。

男は女から承認を受けるよりも、男から承認を受けるほうがもっと大事です。いつも思うのですが、男にとって最もエロチックな、官能的な瞬間は、ライバルだと認めた男と、真剣勝負

で渡り合い、グッと踏み込んで刃を交えたとき、自分の耳元で相手から、「おぬし、できるな」と言われること。この一言を言われるほど、ぞくぞくする気分はないと。これは女との性的なエクスタシーを超えるエロチックな経験なのではないでしょうか。

ただし、このように「恋」という気持ちが、男に向けられるからこそ、そこで性的な欲望は抑制されなければなりません。なぜかといいますと、欲望を向ける側は、欲望の主体になりますが、向けられる側は欲望の客体になるからです。欲望の客体になることは、女性化されるということです。男にとって、女性化されること以上の危険はありません。それは、自分の男らしさを根源的に損なうものだからです。

ですから、恋情があっても、ホモエロティシズム（Homoeroticism）、すなわち同性間の性的な欲望は抑制されなければなりません。男同士のつながりのなかから、注意深く、エロティシズム（eroticism）を検閲して取り除くのが、「ホモフォビア」「ホモ狩り」というものになります。

私がこのようなことを言うには、タネ本がありまして、イヴ・コゾフスキー・セジウィック（Eve Kosofsky Sedgwick）という一九世紀イギリス文学の研究者の書いた『男同士の絆』という本です。彼女が提唱した「ミソジニー」と「ホモソーシャル」、そして「ホモフォビア」という概念の三点セットを覚えておきますと、とても使いでがいいです。いろいろな現象が、「ふうん、ああ、そうか。あれってホモソーシャルなんだね」「あれってホモフォビアだね」というように、とてもよく理解できます。私がこのタネ本をもとに書いたのが、『女ぎらい　ニッポン

のミソジニー』（朝日文庫、二〇一八）という本です。

このセジウィックの概念に従いますと、社会には以下の四種類のメンバーがいるということがいえます。その第一は、男によって男と認められた男です。第二は、男になりそこねた男です。第三は、男によって女と認められた女です。最後に、男によって女と認めてもらえない女がいます。男になりそこねた男は、女性化（feminize）されます。女性化された男性たちは、「オカマ」「ホモ」といわれます。人類学では「男／女の他に、第三の性もある」といわれることもありますが、「第三の性」という男でも女でもない第三の性は、ほとんどの場合はこれ、すなわち男になりそこねた男、女性化された男性たちの集団を指すカテゴリーとなっています。そのくらい、この二項対立、男か、女か、男でなければ女、女でなければ男というカテゴリー装置の力は、ものすごく強力だといえます。

ホモエロティシズムとは、男への愛、男らしさへの愛です。女性化された男が「ホモ」と呼ばれますが、男を愛するのに、女になる必要は何一つありません。男を愛するために、オネエ言葉を使ったり、女装をしたりする必要はこれっぽちもありません。

最近のゲイカルチャーのなかには、男らしい男性同士のカップルがいくらでもいます。ひと昔前は、レズビアンのあいだにも、「ブッチ（Butch 男役）とフェム（Femme 女役）」がいるといわれてきましたが、女を愛するのに、男のふりをする必要は何ひとつありません。レズビアンが男装をしたり、男っぽく振る舞ったり、逆にゲイがオネエ役をやったりということが、

最近はだんだんと少なくなりましたが、なぜ、そういう役割分担があったのでしょうか。

あるレズビアンの女性に聞きましたら、「人を愛するのに異性愛のモデルしかなかったから、それを模倣するしかなかったのよ」という答えを得たことがあります。とても納得しました。異性愛以外のモデルがあれば、女を愛するのに、男になる必要はなく、男を愛するのに、女っぽくふるまう必要はなくなります。

ホモソーシャル、ホモフォビア、ミソジニーの「制度的配置」を模式化して描いたものが次の図です。

社会がホモソーシャルな男性集団ででき上がっているとしたら、この境界内に入らせてもらえず、排除される男性たちが登場します。この男性たちを排除する動きを、「ホモフォビア」といいます。女性は、男性集団の境界の外側にいます。女性がホモソーシャルな男性集団と結びつくための制度的な参入ルートは結婚です。結婚は、特定の男性に所属するという契約で、男性集団は特定の男に所属した女には、他の男たちは手を出さないという紳士協定をつくっています。結婚というものは、男性社会のなかでの女の定位置、指定席です。これが妻、母、主婦です。ホモソーシャルな社会、別な言葉で言いますと、家父長的な社会が、女性に与えた指定席に入るためのたった一つの方法が結婚ですから、おひとりさまは生きづらいということになります。

反対に、どの男にも所属しない女には、男たちは何をしてもかまわないという黙約ができま

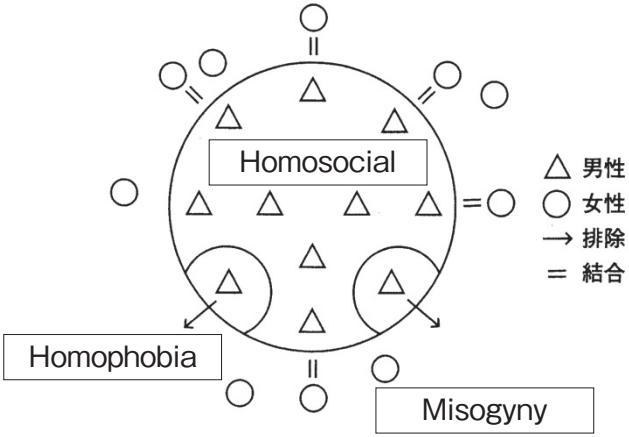

図　ホモソーシャル・ホモフォビア・ミソジニーの概念図

す。誰にも所属しない女は、「娼婦」と呼ばれます。同時に、女たちは、男性集団との関わり（契約）を持つために、常に潜在的なライバル状態に置かれます。ですから、女同士の連帯は難しいのです。

では、女が性的な主体になることは、あるでしょうか。男は性欲の主体になりますが、女は性欲の客体に自ら進んでなることで、性欲の主体になります。つまり女の性的主体化の回路は、いったん男性化の回路を迂回して自らを欲望の客体化することを通じて、性的主体化を遂げるということです。

例えば、ＡＶでもピンナップでも何でもいいですが、いったい自分が何にむらむらするか、つまり発情装置が起動するかを考えてみてください。発情は大脳新

皮質で起きる学習された欲望で、決してＤＮＡやホルモンの反応ではないことを、覚えておいてください。男性は、女性の身体、もしくは身体のパーツに反応することがわかっています。ヘアヌードみたいなボディだけでなく、胸とか脚などボディのパーツにかんたんに反応します。パーツのなかでも、すごく変わったパーツにむらむらする男性もいます。例えば、女自身には決して見えないうなじとか、ひかがみにエロティシズムを感じるとか。「ひかがみ」ってわかりますか。膝の裏です。自分では見られないですよね。「ひと、それぞれ」と言いますが、それだって学習されたものです。

では、女性には逆のことが起きるでしょうか。女性が男性のヌードやボディのパーツ、性器や体毛に反応することはあまりありません。女の人がむらむらするのは、男の欲望の対象となった自分自身に対してです。ですから、勃起したペニスのアップ写真などを見て、むらむらする女よりも、むしろ、性的欲望の客体化された女性の身体とそのパーツに自己投影することで、女性もむらむらするという、主体的な客体化という回路があることがわかってきました。ですから、女性の場合には、むしろ進んで自己身体を客体化します。これを「ナルシシズム（narcissism）」的主体化といいます。ナルシシズムを自己中心性ととり違えてはいけません。客体化の視線が男性回路を迂回するほどに、自己客体化が徹底しているということにほかなりません。

先ほど言いましたように、ホモソーシャルな社会における女性に対する資格付与、つまり、「お

まえは、この社会に居場所があるよ、いてもいいよ」と言ってもらうための指定席をゲットすることが結婚ですから、結婚からはなかなか降りられません。ホモソーシャルな社会では結婚したほうが、はるかに女性はラクで生きやすいですし、しないと、逆に指定席が得られないまま、爪弾きを受けることになります。

ずいぶん抽象度の高い理論ばかり話してきました。このようなことをめったに話させていただく機会がありませんので、「今日は、これでいこう」と思って大学の講義モードでやったのですが、理論は役に立ちます。このような理論装置をいったん身に付けますと、いろいろなことがとても理解しやすくなります。男の謎がどんどん解けます。

なぜ女好きと言われる男は、「あそこで何人やった。ここで何人やった」と女の数を誇るのでしょうか。なぜ、東南アジアに行って「国際親善に励んできました」と、「買春」を誇るのでしょうか。「ボク、女好きです」というのは、実は「女を道具のように扱うのが好きです」と言っているのと同じです。

それから、名古屋近辺の皆さん方はどうかわかりませんが、昔、地方のヤンキーは、ガールフレンドと一緒に連れだっているときに、自分の遊び仲間の少年たちが来たら、「あっ、オレ、あいつらと付き合うから行ってくるわ」と言って、デートの最中に女の子をほったらかして一緒に行ってしまうみたいなことがありましたね。これは踏み絵です。つまり、女よりも「ホモソーシャルな男性の絆（homosocial bond）」のほうを優先するかどうかという踏み絵を、そのとき

男は踏まされているのです。

男はこのとき、男同士のつながりのほうを、女性との関係よりも高く評価し、逆に女性を自分の道具にするという選択をしています。それを「ミソジニー」といいます。「男尊女卑」と言ってもいいのですが、「女嫌い」と訳します。これがわかると謎が解けます。どのような女にむらむらするかといえば、「かわいい女」と言いますが、では、「かわいい」とは何かといえば、「あなたを決して脅かしません」という保証のようなものです。男に「かわいい」と言われて喜ぶのは、侮られているのと同じです。

なぜ男は、自分より三K（高学歴・高経済階層・高身長）の女に対して萌えないのでしょうか。「なぜ男は自分よりも学歴の低い女性を選ぶのか」とか、「なぜ、東大女子だと退かれるのか」といえば、男は自分が権力行使をしやすい相手を選ぶ傾向があるからです。「学歴が低い」女子なのに選ぶのではなく、「学歴が低い」女子だから、選ぶのです。妻の経済力が、夫の経済力を上回ると、なぜ男はあんなにいじけるのかといえば、自分の男としてのアイデンティティが脅かされるからです。「なぜ男は妻や恋人を殴るのか」といえば、これも妻や恋人だから、殴るのです。なぜかといえば、自分に所属するものだから、殴ってもよい存在だから……と謎が解けます。

このように、「ミソジニー」という概念はとても使いでのある概念です。男の女に対する差別視が説明できるだけでなく、女自身の女に対する自己卑下や自己嫌悪も説明できます。

ですから、女の謎も解けます。「なぜ女は自分よりも三K（高学歴・高経済階層・高身長）の男でないと萌えないのか？」といえば、権力のある男に選ばれるだけの価値のある女、という自己客体化があるからです。「なぜ女は嫉妬深いのか？」と言われると、ホモソーシャルな社会における指定席をめぐって、女同士が常に潜在的なライバル関係に置かれるため、連帯が難しいからです。「なぜ女の敵は、女（と言われるの）か？」も、ミソジニーという概念が説明してくれます。

ひと昔前には、「女同士の間には友情は成り立たない」といわれていました。友情は、男の独占物でした。私が若かった頃は、本当に悪夢のような時代でした。「男と女の間に友情は成り立つか？」「女同士の間に友情は成り立つか？」というディベートがあったりしましたが、今はどちらもあって当たり前になりました。

私は、『女友だち』（フェミックス）という本を書いた木村榮さんという女性と対談したことがあります。その時「どうして、これまで女同士の間に友情が結べないと思われてきたんでしょうね」と言ったときの、木村さんの答えがとても秀逸でした。「リスペクトがなかったからじゃないですか」と。尊敬できる相手でないと、友情は結べません。自分が女であること、あるいは相手が女であることに対する侮蔑や嫌悪を感じていたら、自分も相手も好きになれないということでしょう。

七　家父長制の共犯者としての女

ミソジニーの効果には、ジェンダー非対称性があります。つまり、「ミソジニー」は、男にとっては女嫌いだけれども、女性にとっては自己嫌悪になるということです。女は、この自己嫌悪（自己卑下）を内面化しないと、ホモソーシャルな社会での女に与えられた指定席に、甘んじることができません。

ホモソーシャルな社会では、女も共犯者です。男同士のホモソーシャルな連帯には、雄鶏と同じ、ペッキング・オーダー（pecking orde 序列・突つき合い順序）ができます。このパワーゲームが、ホモソーシャルな集団の特徴です。そこにはヒーローが生まれます。男はパワーゲームのヒーローになるのが一番大きな目標ですから、男にとっては、「卑怯者」「弱虫」「臆病者」という言葉が一番堪えます。この言葉に耐えられないので、戦場に赴くとか、無茶な冒険をやるとか、チキンゲームをやったりします。男にヒーロー願望がある一方で、女はヒーローが大好きです。ヒーローに選ばれることが、自分の値打ちの高さを証明すると思っているからです。

ヒーローに与えられる報酬が、カネと権力です。長い間、男という生きものと付き合ってきて、カネと権力が嫌いな男性にほとんど会ったことがありません。男は、本当にカネと権力に弱いです。ただし、男のことばかり言えないのは、女もカネと権力を持った男が好きだからです。「女はカネについてくる」と堂々と言ったのが、ホリエモンという男です。事実、そのような女も

います。このようなホモソーシャルな社会が、今日までずっと続いているんですね。

男は、女になりませんから、ミソジニーに傷つきません。ですが、女は「ミソジニー」に傷つきます。ミソジニーは女にとって自己嫌悪ですから、自己嫌悪するということは、自分を愛せず、傷つくことです。その「ミソジニー」を回避する戦略があります。それは、「女って嫌ね、感情的で嫉妬深くて……。でも、私は別」という戦略です。この「私は別」戦略のなかには、「キミは、女のなかでは特別だよ。だって、こんなに理性的なんだから」「男に伍して仕事ができるんだから」という「エリート戦略」と、もう一つ、「キミは女のなかでは特別だよ。だって、女に入ってないんだから……」という例外戦略、女から降りる「ブス戦略」があります。このブス戦略が、大変上手な女性がいます。作家の林真理子さんです。この人は、女の嫌なところ、妬み、嫉み、僻みを書くのが天才的にうまい人です。しかし、考えてみてください。妬み、嫉み、僻みとは、どのような感情でしょうか。とうてい勝ち目のない相手に対して、弱者の持つ感情にほかなりません。これは怒りとは全く違います。怒りという感情は、対等な関係のなかで、自分の持つ当然の権利が侵されたと感じる正当な反応です。ようやく、セクハラの告発のなかで、女たちは「怒り」という感情を持ちはじめました。

女のなかには、「ミソジニーなんて、私、味わったことないわ」「男だ、女だって、こだわるほうがおかしいんじゃない?」とか、「私には関係ないわ」と言う人たちがいます。しかし、ジェンダーの制度的配置は、私たちがこのジェンダーまみれの言語を使う限りは、重力のように瀰(び)

漫(まん)しています。その重力が「知」という権力の磁場です。そこから降りることは、誰にもできません。

そのなかでは、女もまた差別者になります。「ミソジニー」という概念が非常に便利なのは、女が被害者だというだけではなく、女もまた家父長制の共犯者（collaborator）になるということです。ホモソーシャルな集団とは、男と認め合った男同士の連帯ですから、そこには「弱さ嫌悪（weakness phobia）」があります。「男は弱音を吐いちゃいかん」「涙を流しちゃいかん」「苦しいとかつらいとか言っちゃいかん」と、子どものときから言われながら、ジェンダー規範を内面化して男になっていくからです。

同じように、女にも「弱さ嫌悪」があります。女のなかには、「被害者になってしまう女の弱さを認められない」「自分は被害者や犠牲者になるほど弱くない」「女の弱さを目の前で見せつけられるのは嫌だ」という考えをする人たちがいます。男性的な価値観に汚染された女たちでしょう。ネトウヨ（ネット右翼）の女性たちの「慰安婦」に対するバッシングを見ますと、彼女たちのなかに、「弱さ嫌悪」があるのではないかと感じることがしばしばあります。「被害者だと言い立てる女が許せない」という感情です。「ミソジニー」は、このような両義的な反応も説明できるようになります。

八　“Undoing gender”と理論の力

では、“Doing gender”の逆は何でしょうか？これを“Undoing gender”といいます。では、“Undoing gender”とは、女性が女性らしくふるまわない、あるいは男性が男性らしくふるまわないことを指すのかといいますと、実は、それもそう簡単なことではないことがわかります。

なぜかといいますと、何が女性らしくないか、何が男性らしくないかということは、女らしさが何で、男らしさが何かを既に知っているから、それからの逸脱ができるわけです。

例えば、リブの女たちがわざと人前で胡坐（あぐら）をかくとか、たばこを吸うとかのふるまいをして、「女らしくないよ」「それではお嫁に行けないよ」と言われたのは、何が女らしさであるかをお互いによく知っているからこそです。そのことによって、「私は普通の女とは違う」「私はただの女じゃない」という例外戦略を取るとき、そのことによって、ジェンダーが再生産されることもあります。ですから、逸脱戦略は、必ずしもそれ自体が“Undoing gender”にならないということです。

もう一度、“Doing gender”とは、いったい何だったかというところに戻ってみましょう。それは性別カテゴリーを参照することで、ある個人のふるまいを解釈する実践です。そうしますと、「あの人がこういうことをしている」「あの人は、こういう格好をしている」「あの人がこういう考えを持っている」ということを、性別カテゴリーを参照して説明せずにすむこと、す

なわち「あの人は、あの人だから……」というように言うことができたら、そこで“Undoing gender”がおこなわれていることになります。

人種に関しても同じことがいえます。「日本人だから」「日本人らしく」と言ったとたんに、そこに“Doing Race”（というべきでしょうか）が実践されていることになります。

このような差別的な言説実践をチェックする、非常にわかりやすいやり方があります。「そこに差別があるか、ないか」ということをチェックするためのキーポイントです。ジェンダーとは、「非対称な差異化」ですから、「項」を入れ替えたときに、成り立つかどうかで、検証することができます。項を入れ替えたら、「なんや、これ？」ということになるなら、そこには非対称な差異化実践、すなわち差別があることになります。

例を挙げましょう、「女性が輝く社会」と最初に聞いたときに、私はムカッとしました。なぜでしょうか。項を入れ替えてみてください。「男性が輝く社会」と言うでしょうか。メイクセンス（make sense）しますか。男性が輝くのは、おつむの天辺（てっぺん）くらいでじゅうぶんです。

「男」「女」というような、直接的なジェンダー・カテゴリーを使わないようなルールや実践にも、性差別的な効果をもたらす実践は、たくさんあります。

私たちは、性差別を以下のように判定しています。そのルールもしくは仕組みが、男もしくは女のいずれかの集団に、著しく有利もしくは不利に働く効果があるときに、それを「性差別的」といいます。

日本型雇用といわれる働き方や、日本企業の長時間労働は、構造的・組織的に女性を排除する効果があることで、結果として性差別的な差異化実践であるとはっきり言うことができます。これを、「間接差別」とも呼びます。「日本型雇用」は今や性差別をもたらす諸悪の根源であることははっきりしてきました。「働き方改革」は、この本丸に切り込むのかと思ったら、今の安倍政権によって、「働かせ改革」というべきものにねじ曲げられました。今のままの職場や労働条件の下に、女が参入していくことは、女にとって性差別の解決には少しもなりません。そのことは、このような理論的な側面からも、はっきり答えを出すことができます。

これからも、女性活躍法や働き方改革、同一労働同一賃金など、一見「女性にやさしい」さまざまな政策や提言が次々に登場するでしょう。その際、それらの政策に賛成するか、反対するか、有権者として何を選ぶかというときに、理論はとても力になります。

だから私たちには学問する意味があるのです。